



Title	樺太アイヌ語研究におけるB.ピウスツキ蠟管再生の功績 (K.Murasaki, “ Merits of Sound Reproduction on B.Pitsudski ’ s Wax Phonograph Cylinders for Sakhalin Ainu Study. ”)
Author(s)	村崎, 恭子
Citation	「ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事 : 白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集, 55-60
Issue Date	2013-10-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/53479
Rights	ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事 : 白老における記念碑の序幕に寄せて. 2013年10月20日. 北海道大学学術交流会館. 札幌市 主催 : 北海道ポーランド文化協会, 北海道大学スラブ研究センター. 共催 : グローバルCOE プログラム「境界研究の拠点形成」. 協力 : 駐日ポーランド大使館, ポーランド広報文化センター
Type	proceedings
File Information	55Murasaki.pdf



[Instructions for use](#)

樺太アイヌ語研究における B.ピウスツキ蠟管再生の功績

村崎 恭子

私の生涯の仕事は、「文字のない樺太アイヌ語を直接話者から習い、記述して他の人にもこの言語を伝えること」です。これは1960年に東大言語学科に学士入学した時から始まり、東外大、北大、横浜国大の教職を歴任、定年退職してから11年経った今も変わりません。

まず、これまで私がこの仕事に従事した半世紀をざっと振り返って、私の仕事に与えた「ピウスツキ蠟管再生」の恩恵がどんなに大きいかをたどってみたいと思います。そして次に、その後の蠟管をめぐる B.ピウスツキの年譜などの新しい研究結果と再生内容の分析から新たに解った樺太アイヌ語研究の新しい展望を考えたいと思います。

「ピウスツキ蠟管再生」をめぐる出来事

1. 1983年7月に100本ほどの蠟管が北大にパリから到着した。
2. 同年の9月に村崎が東京外語大付属日本語学校から北大言語文化部日本語系に転職して札幌に赴任。朝倉研究室で再生音が完成し、カセットテープに録音された。
3. 1984年2月 蠟管再生音を持ってNHK取材班と一緒に道内の樺太アイヌ古老を訪ねる旅。
2/18-20 札幌-苫小牧-日高門別-振内-新冠-札幌。2/19 村崎が浅井タケさんに初めて会う。
4. 1984年6月25日 NHK特集「ユーカラ沈黙の80年～樺太アイヌ蠟管秘話～」が全国TV放映。
5. 1985年3月 北里蘭録音の蠟管243本が京都で発見、再生プロジェクト始まる。
6. 1985年5月 樺太アイヌ古老と一緒に芽室で合宿、蠟管再生音を聞いてもらうため。
7. 1985年9月 ①ピウスツキ国際シンポジウム「B.ピウスツキとアイヌ文化」北大
8. 1986年7月 R.アウステルリッツ先生を北大に招聘(JSPSで2ヶ月)
9. " 8月 G.オタイナ女史を北大に招聘(科研で2ヶ月)
10. " 9月 ロバート(・アウステルリッツ)さん&ビクトリアさんと村崎が山田秀三先生と一緒に初山別を探す地名の旅。
11. 1990年7月17日-8月20日 サハリン調査旅行「サハリンにおける少数民族の言語に関する調査研究(文部省科研国際学術研究)」
12. 1991年10月 ②ピウスツキ国際シンポジウム「B.ピウスツキ生誕125周年記念シンポジウム」サハリン・ユジノサハリンスク
13. 1992年9月 村崎が横浜国大教育学部に転勤。
14. 1994年4月30日 浅井タケさん没。
15. 1999年9月 ③ピウスツキ国際シンポジウム、ポーランド・クラクフ&ザコパネ
16. 1999-2003年 ELPR(環太平洋の「消滅の危機に瀕した言語」に関する緊急調査研究)
17. 2001年9月27日-12月27日 ポーランド・スロベニアの日本語学科のある大学で「アイヌの言語と文化」集中授業
18. 2002年9月 丹菊逸治さん(当時千葉大院生)が横浜国大に来てくれて勉強会開始。これが「樺太アイヌ語の会」に発展して現在も進行中。

19. 2011年3月 一般向けの「樺太アイヌ語セミナー」開始、現在も進行中。

「ピウスツキ蠟管再生」の功績、波及効果

1. 樺太アイヌ語の新しい話者に出会うことができた。1974年に藤山ハルさんが亡くなった時誰もがこの方言は絶えたと思っていた。樺太アイヌ語の寿命が10年伸びた。
2. 母語の音声が孤独な話者(タケさん)に大きな喜びを与えた。同時に研究者もリアルな勇気を与えられた。
3. 伝承者、実演者の絶えて久しいハウキの実態を再現できた(表1)。
4. 蠟管演奏者と書写テキスト(1912)のインフォーマントが特定できた。話者9人中4人、東内忠蔵(ラマンテ)、山辺安之助(ヤシノシケ)、シシラトカ、イポフニの声が入っていた(表2)。
5. 年譜などの周辺資料によって蠟管の収録年月日、収録地などの特定に手がかりが得られるようになった。
6. 研究の幅が国際的にも、学際的にも、時間的にも広がった。
7. 話者の絶えた言語を研究するしっかりした展望が開けた。
8. 樺太アイヌ語口承文芸を再現する手がかりができた。

[今後の課題]

以下の二つの緊急課題が考えられる。

1. 樺太アイヌ語テキスト研究(日本・ポーランド国際研究)
 - ① B.ピウスツキ(1912) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*
 - ② 金田一京助(1912) あいぬ物語
 - ③ 金田一京助(1913) 北蝦夷古謡遺編
2. サハリン・クリール先住民の言語地名を手掛かりとしたサハリン・クリール地誌研究(日本・ロシア国際研究)

例えば、アイヌ語地名についてであるが、①の N14, 15, 24, 25 の話者 Ipoxni の収録地は Xunup とあるが、これは hup-nup 《トドマツ・原》と推定できる。しかし、実地調査をしないと特定できない。こんな地名がたくさんある。北海道とは異なるアイヌ語地名のクセも見つかるかもしれない。このような国際研究が盛んになれば領土問題などだんだん消えていくことを期待する。

2011. 9. 17 日本社会言語科学会招待講演

「樺太アイヌ語の終焉とその再生の可能性」資料より

1. 樺太アイヌ語の半世紀4つのエポック

- ① 黄金の常呂時代 (1960-1974)
- ② 暗黒の模索時代 (1974-1983)
- ③ たった一人の語り部の時代 (1983-1994)
- ④ アイヌ言語文化振興と再生の時代 (1997-現在)

2. 忘れられない人々、私が教わった語り部たち(敬称略)

- ① 藤山ハル(1900-1974) 西海岸ライチシカ(来知志)、常呂在住
- ② 太田ユク(1894-1980) 西海岸マオカ(真岡)、常呂在住
- ③ 長嵐イソ(1882-1964) 東海岸ナイロ(内路)、タライカ方言話者、斜里在住
- ④ 浅井タケ(1902-1994) 西海岸オタスフ(小田洲)、日高門別在住
- ⑤ 島村トキ(1899-1993) 西海岸ウシロ(鵜城)出身、日高門別在住

3. 樺太アイヌゆかりの先達者たち

- ①B.ピウスツキ(1866-1918)リトアニア出身、ポーランド人
- ②チュフサンマ(1878-1936)東海岸アイハマ(相浜)出身、B.ピウスツキの妻
- ③山辺安之助(1867-1923)東海岸オチョポッカ(落帆)出身、南極探検隊にイヌ使いとして参加
- ④東内忠蔵、ラマンテ(1872-1908)東海岸トンナイチャ(富内岸)出身、村でただ一人のハウキの語り部
- ⑤千徳太郎治、タロンチ(1872-?)東海岸ナイブチ(内渚)
- ⑥北里 蘭々(1870-1960)ドイツ語教師、蠟管録音機で日本語のルーツを求めてボルネオから樺太まで録音旅行した、北里柴三郎の従弟
- ⑦金田一京助(1882-1971)岩手県出身
- ⑧山田秀三(1899-1992)東京出身
- ⑨服部四郎(1908-1995)三重県亀山出身
- ⑩知里真志保(1909-1961)幌別出身
- ⑪久保寺逸彦(1902-1971)網走市出身
- ⑫A.チェホフ(1860-1904)1890年にサハリン旅行『サハリン島』
- ⑬ラペルーズ(1741-1788)フランスの探検家、『世界周航記』の中に樺太アイヌ語の語彙集が収められている。
- ⑭伊能忠敬(1745-1818)地理学者、上総の人、大日本沿海全図作成
- ⑮間宮林蔵(1775-1844)北方探検家、常陸の農家出身、1808(文化5)年に樺太探検
- ⑯松浦武四郎(1818-1888)北方探検家、1856(安政3)年に樺太探検

4. 日本・樺太関係史

- 1787 ラペルーズ樺太探検
- 1808 間宮林蔵が樺太探検、間宮海峡を発見
- 1856 松浦武四郎が樺太探検
- 1875 樺太千島交換条約、アニワ湾一帯の樺太アイヌ 800 余人が北海道に強制移住帰化させられる。
- 1887 B.ピウスツキ樺太に流刑
- 1890 チェホフ樺太旅行
- 1896 ピウスツキ、刑が軽減されて移住農民の身分を得る。アイヌに初めて出会う。
- 1902-03 ピウスツキの蠟管録音機を使って録音が行われた。(樺太と北海道で)
- 1904 日露戦争、山辺安之助日本軍に協力して勲章を与えられる
- 1907 ポーツマス条約によって樺太島北緯 50 度以南を日本が統治することが認められ樺太庁が置かれる
- 1907 金田一京助はじめて樺太へ旅行。トンナイチャで山辺安之助と東内忠蔵(ラマンテ)に会う
- 1910 樺太アイヌ二人、山辺安之助、花森新吉が白瀬隊長南極探検隊に参加。
- 1915 金田一京助第2回樺太旅行
- 1935 久保寺逸彦樺太で採録
- 1940-43 知里真志保樺太に滞在
- 1944 夏 知里真志保再度樺太訪問
- 1945 第二次世界大戦終結。確かなデータはないが、敗戦により樺太の日本人居住者はアイヌ人も含めて 30 万人が日本へ引き揚げる。そのうち 28 万人が北海道へ引き揚げたと

いう。樺太アイヌの居住者は1500人足らずと思われる。昭和20年のデータしかない。

5. 樺太アイヌ(K)の特徴、北海道アイヌ(H)と異なる点

- (1) Kには母音の長短の区別があるが、Hにはない。ex. reera(K)/ rera(H) (風)
- (2) Hの音節末-p, -t, -k, -rがKでは-h, -rVになる。ex. cep/ ceh(魚)、set/ seh(ベッド)、tek/ teh(手)、kur/ -kuh ~ -kuru (人々)
- (3) Kでは、複数表示が文法的で義務的である。
- (4) Kでは、数詞は1から10まではHと同じだが10以上はHが二十進法なのにKでは十進法である。kunkutu(～十)、tanku(～百)、wantanku(～千)
- (5) Kでは、老人ことばと若者ことばの区別が多く、語彙や語法についてある。ex. kurasno 若/ kunne 老(黒い)、kuani 若/ anoka 老(私)
- (6) 口承文芸のジャンルや形式がKとHでは異なる。ex. hawki(K)/ aynu yukar(H) (英雄叙事詩)、oyna(K)/ kamuy yukar(H) (神謡)
- (7) Kには、シカ(鹿)はいないがトナカイがいる。
- (8) Kには、獣皮や魚皮でつくる着物がある
- (9) K特有の民族楽器がある。tonkori(トンコリ、五弦琴)、kaco(シャーマンの太鼓)

6. 参考文献(出版年代順)

- Pilsudski, B. (1912) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore, Cracow, in: K.Refsing, ed. (1996), Early European Writings on the Ainu Language, vol.10, Curzon*
- 金田一京助(1913)『あいぬ物語』博文館(『金田一京助全集5, 6』三省堂1973に収載)
- 金田一京助(1914)『北蝦夷古謡遺篇』郷土研究社
- 知里真志保(1942)アイヌ語法研究～樺太方言を中心として～、『樺太庁博物館報告第4巻第4号』(『知里真志保著作集3』平凡社1973に収載)
- 服部四郎(1957)アイヌ語における年長者層特殊語、『季刊民族学』21-3(『日本の言語学』大修館2002に収載)
- 服部四郎(1961)アイヌ語カラフト方言の「人称接辞」について、『言語研究』39
- 村崎恭子(1963)千島アイヌ語絶滅の報告、『季刊民族学』27-4
- 古川(村崎)恭子(1971)樺太アイヌ語テキスト～タライカ方言民話～、『金田一京助博士米寿記念論集』三省堂
- 村崎恭子(1976)『カラフトアイヌ語』国書刊行会
- 村崎恭子(1977)呪文・呪術と言語——あるカラフトアイヌのシャーマンのこと——、『伝統と現代』1977年5月号、伝統と現代社
- 村崎恭子(1979)『カラフトアイヌ語——文法編』国書刊行会
- Alfred & Elzbieta Majewicz (1986), *An Ainu-English Index-Dictionary to B. Pilsudski's Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore of 1912, Adam Mickiewicz University Press, Poznań Poland*
- 小林忠雄編訳(1988)『ラペルーズ世界周航記——日本近海編——』白水社
- 田村すず子(1988)アイヌ語、『言語学大辞典』三省堂
- 村崎恭子(1992)B.ピウスツキ録音の樺太アイヌのYAYKATEKARA「恋の歌」、村崎恭子編『サハリンとB.ピウスツキ——B.ピウスツキ生誕125周年記念国際シンポジウム報告——ユジノサハリンスク1991.10.31-11.2——』ピウスツキをめぐる北方の旅実行委員会
- 村崎恭子(1989)『樺太アイヌ語口承資料1』昭和63年度科学研究費補助金(一般研究C)「樺太アイヌ語の記述的研究」報告書
- NHKビデオ『ユーカラ 沈黙の80年～樺太アイヌ蠟管秘話～』50分 NHK特集名作100選

- 村崎恭子(1993)『サハリンにおける少数民族の言語に関する調査研究——サハリンアイヌ語、ウィルタ語、ニブフ語』文部省科学研究費補助金(国際学術研究)研究報告書
- 村崎恭子・T.デグラーフ(1993)サハリンにおける少数民族の言語状況、『学術月報』46-3
- 村崎恭子訳編(2001)『浅井タケ口述 樺太アイヌの昔話』草風館
- 村崎恭子訳編(2001)『浅井タケ口述 樺太アイヌの昔話 CD10 枚版』草風館
- 村崎恭子(2001)B.ピウスツキ収録の昔話 11 編と民話 1 編——再転写によるアイヌ語テキストと日本語訳——、『少数民族言語資料の記録と保存——樺太アイヌ語とニブフ語——』ELPR 報告書 A2-009、2001
- 村崎恭子(2003)ことばの永遠の命を願って——樺太アイヌ語の半世紀——、『少数言語をめぐる 10 の旅』大角翠編、三省堂
- ジョン・バチラー著・村崎恭子校訂(2008)『ジョン・バチラー自叙伝 我が記憶をたどりて』北海道出版企画センター、北方新書 009
- 村崎恭子(2009)『樺太アイヌ語入門会話』緑鯨社
- 村崎恭子編(2010)『藤山ハル口述 樺太アイヌの民話(ウチャシクマ) ウェネネカイペ物語』AA研北東アジア研究第2巻、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 田澤守編(2011)『カラフトアイヌの稚咲内移住に関する研究調査——概報 1——』樺太アイヌ協会
- 村崎恭子(2012)話者の絶えた樺太アイヌ語——その終焉と再生の可能性——『社会言語科学』第14巻第2号 2012年3月、3-16 ページ
- 村崎恭子編(2013)『藤山ハル口述 樺太アイヌ語例文集(1)』北海道大学アイヌ・先住民研究センター

(なお、斜体で示した資料は、今回の考察で蠟管再生音声と何らかの関連性が認められたもので注目すべきものである。)

[表 1] ピウスツキ蠟管の録音内容
樺太アイヌ関係ジャンルと編数

分類	ジャンル(アイヌ語)	日本語訳	P 蠟管数	蠟管番号
韻文の物語	(1) hawki	英雄詩曲	13 編	13,20,23,25,27,29,30,33,39,42,43,48, 55
〃	(2) oyna	神謡	6 編	21,36, 38 ,41,49,63
散文の物語	(3) tuytah	昔話		
〃	(4) ucaskuma	民話	1 編	46
歌謡	(5) yaykatekara	恋の歌	8 編	7,17,24,35,44,45,59-1,59-2
〃	(6) ihunke	子守歌	2 編	22,53
〃	(7) hecire haw	踊り歌	3 編	15,37 ,52-1
〃	(8) cipo haw	舟漕ぎ歌	1 編	14
〃	(9) sake sinohca	酒歌	1 編	40
〃	(10) rekuhkara	喉鳴らし	5 編	12-1,12-2,12-3,16,28
〃	(11) tusu	巫術	5 編	26-1,26-2,52-3,52-4,60
〃	(12) yayan yuukara	普通の歌	4 編	18-1,18-2,47,52-2
楽器演奏	(13) tonkori	トンコリ演奏	3 編	19-1,19-2,32
?	(14)?	不明	2 編	18, 54
		合計	54 編	

ただし、**太字の番号**の蠟管は話者が特定できるもの(7編)。

- ・ 上のデータは ICRAP(B.ピウスツキ北方資料研究会)の言語・音楽班(1983-1986)で再生された蠟管テープを、メンバーで実際に聞いたり古老に聞いてもらったりして、検討して得たものである。
- ・ 樺太関係は 1902 年に録音された可能性が高い。
- ・ ピウスツキ北方資料研究会言語・音楽班メンバーは以下の通りであるが、現在故人になられた方も

多く、所属などは当時のものである。(五十音順)浅井享(富山大)、池上二良(札大)、大島稔(小樽商大)、萱野茂(二風谷アイヌ資料館長)、切替英雄(北大)、佐藤知己(北大)、谷本一之(北教大)、田村すず子(早大)、中川裕(千葉大)、萩中美枝、藤村久和(北海学園大)、村崎恭子(北大)。

- ・ 実際に再生された蠟管は全部で 63 本で、ケースだけがあって蠟管がないものが 6 本あり、蠟管が存在するものには蠟管ナンバーを 1 から 63 をつけ、ケースだけの蠟管には 64 から 69 の番号を便宜的につけてある。従って、実際の録音内容がケース記述と異なる場合が多々ありうる。
- ・ 再生された 63 本のうち実際に音声聞き取れるのは **54 本**だけで、後は雑音ばかりで無音声で役に立たない。1 本(約 2 分半)の中に複数の演目が入っている場合がある。それをハイフンで示した。
- ・ ラベル記述から得られる録音情報については、切替英雄「ピウスツキ蠟管ケースの記載」『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』国立民族学博物館研究報告別冊 5 号(1987)に詳しい。

[表 2] List of the Speakers in Piłsudski's "Materials 1912"

	話者	話者和名	年齢	収録地 (P 表記)	収録地 (M 表記)	収録月	年	蠟管ナンバー 記載情報
N.1	Numaru		53	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	
N.2	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	w14, w15
N.3	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	
N.4	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	
N.5	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	
N.6	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	
N.7	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	
N.8	Sisratoka		28	Tarajka	Tarayka	Jan.	1903	
N.9	Ipoxni		32	Xunup		Jan.	1903	w37, w55
N.10	Ipoxni		32	Xunup		Jan.	1903	
N.11	Ramante	東内忠蔵	36	Tonajci	Tonnayca	May	1903	w38 wenenekaypa
N.12	Sisratoka		28	Tarajka		Jan.	1903	
N.13	Ponciku		28	Aj	Ay	Jan.	1904	
N.14	Ipoxni		32	Xunup		Jan.	1904	
N.15	Ipoxni		32	Xunup		Jan.	1903	
N.16	Numaru		53	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	
N.17	Cibeka		44	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	
N.18	Ipoxni		32	Xunup		June	1903	w54
N.19	Ipoxni		32	Xunup		May	1903	
N.20	Jorusamma		42	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	
N.21	Jasinoske	山辺安之助	38	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	w46?(sumari caskuma)
N.22	Jasinoske	山辺安之助	38	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	
N.23	Jasinoske	山辺安之助	38	Tunaitchi	Tonnayca	May	1903	
N.24	Ipoxni		32	Xunup		Feb.	1903	
N.25	Ipoxni		32	Xunup		Jan.	1903	
N.26	Nita		28	Aj	Ay	Dec.	1903	
N.27	Nita		28	Aj	Ay	Dec.	1903	

(話者総数 9 名)

(蠟管 7 本・話者 4 名)

* Author & title: K.Murasaki, "Merits of Sound Reproduction on B.Piłsudski's Wax Phonograph Cylinders for Sakhalin Ainu Study."